

400文字の  
異世界攻略



## 1日目

目が覚めると緑の髪の女神がいた。

「あれ、俺は確かトラックに轢かれたはずだが。もしやこれは異世界転生というやつか」

「ちよつと違います」

女神が言った。

「貴方はいま元の世界で重体となり生死の境をさ迷ってます。精神だけがこの世界に転移してきたわけです」

「ふうん。それで、俺はこれから何をすればいいんだ」

「30日以内に魔王を倒してください」

「いやだと言ったら？」

「いやなら元の世界に帰してあげますけど、

ただ帰っても重体ですからたぶん死にますよ。内臓とかぐちゃぐちゃになってますし」

「ひえっ」

「魔王を倒せば願いが一つ叶います。つまり貴方は命を助けてもらえるわけです」

「選択の余地はないってことか。やれやれ」

「なにが『やれやれ』ですか。もっとやる気を出しなさい」

「異世界に来たら、みんなこう言うんだ」

こうして俺の冒険は始まった。

## 2日目

女神の神殿を出ると、斧を持った魔物が現れた。

「ゴブリンですね。最下級の魔物です、軽くやっちゃいましょう」

「なにが『やっちゃいましょう』だ。刃物持ってるじゃねーか、やべえよ」

ゴブリンは容赦なく斧をふり回してきた。直撃したら普通に死ぬレベルだ。

「ひい！　なんか戦う方法ないのかよ!？」

「なぜ私に聞くのですか。それは現実の貴方と同じ能力の肉体ですよ」

「それって何の取りえもないってことじゃねーか。チート能力とか付けてくれないの？　他ではみんなやってるよ」

「よそはよそ、うちはうちです」

偉そうに言うが、単にできないだけなんだろう。無能はこの女神も同じということだ。

「誰かー！　助けてくださいーい！」

暴漢に襲われた時、一番の対応策は大声で叫びながら逃げることだ。

「はあ……こいつハズレだったかな……」

女神は小声で言ったが、俺にははっきり聞こえた。

### 3 日目

「やれやれ、異世界って思ったよりハードなんだな」

「『やれやれ』言うな。ゴ布林相手に泣いて逃げ出す勇者なんて、初めて見ましたよ」

「勇者？」

「魔王討伐のために別世界から召喚された者たちは、そう呼ばれるんです」

「じゃあ俺と同じような人間は他にもいるのか。そいつらはどうなったんだ？」

「さあ……」

「目をそらすなよ。怖いだろ」

街道の先に見えた。

「お、やっと着いた。とりあえず、町の中なら魔物に襲われることはないんだよな」

「言っておきますが、安全な町に引きこもっていても、あと27日のタイムリミットが過ぎれば貴方は強制的に元の世界のぐちゃぐちゃの身体に戻されるんですよ。そして死にます」

「わかってるよ」

「元の世界でやってたようなニート生活は通用しません」

「ニートじゃねえよ俺は」

わりとそれに近いダメ人間ではあったが。

#### 4日目

町中にかかる橋の下で俺は目覚めた。

「町についても結局、野宿かよ」

「文無しなんだから当たり前です。道中の魔物を倒していれば、お金が手に入っていたのに」

「丸腰であんな化け物に勝てるわけないだろ」

この女神は、一見役立たずだけど実はレアなスキルとか、そういうのもくれやしない。

本物の役立たずだ。

「とりあえず今日は武器屋に行く」

一番安い武器は銅の短剣が10万ルピーだった。

「10万ルピーってどれくらいだよ」

「この町のアルバイトの時給が1000ルピーくらいですね」

「金を貯めてる間に死んじゃうだろ」

いや、そもそも剣や槍を買ったところで、俺にそんなものの振り回して魔物を叩き切るなんて芸当ができるわけがない。

「魔法使いとかの方がいいかな。どうすればなれるんだ？」

「最低10年修業して、ようやくマッチなして火を起こせるくらいになります」

こんなんでも、どうやってあと26日以内に魔王を倒せというのか。

異世界は理不尽すぎる。

## 5日目

「マジックアイテムみたいなのが欲しいんだけど」

女神に相談してみた。

「なんです、それ」

「持つてるだけで誰でも魔法が使えて、遠くから相手を攻撃できるやつ」

「ノロマでグズの無能が、何の苦勞もなく、自分だけ安全圏から一方的に敵を蹂躪したい、というわけですか」

「そうだよ。悪いかよ。こっちは命がけなんだ」

女神の案内で魔法屋にやって来た。町で一番高級な店らしい。

振るえば火球が飛び出す「火の剣」が最

高級品だった。値段は一億五千万ルピー。

「これを買う。金は明日までに用意するか、それまでキープしといてくれ」

「なに言ってるんです。買えるわけないじゃないですか」

「借金するんだよ。闇金でも高利貸でもいい。どうせ25日後には俺はこの世界からいなくなるんだから、返済の心配はいらない」

「ドクズ」

「だから、こっちは命がけなんだよ」

手段を選んではいけないのだ。

## 6日目

町のヤクザから一億五千万ルピー借りて、火の剣を手に入れた。

ひと月後に利息込みで二億ルピー返済しなければ、俺は内蔵を取られ、女神は奴隷として売り飛ばされるとのことだ。

「あんたって最低のクズ野郎ね」

「人を勝手に召喚して魔王と戦わせるお前のほうがクズだろ」

「私が召喚しなければ、そもそもあんたは死ぬ運命だったのよ」

いつのまにか女神が俺を「貴方」から「あんた」と呼ぶようになっていた。

「魔王を倒せば、王様とかそのへんが褒美で二億くらい出してくれるだろ。多分な」

町を出るとさっそくゴブリンが現れた。

火の剣を振ると、火球が飛び出し、ゴブリンの丸焼けが出来上がった。

「最弱の魔物を倒すまでに6日もかかったわね」

「一応聞くけど、魔王はこいつよりずっと強いんだよな」

「100兆倍強いわよ」

「あと24日でそれを倒すのか」

いまだに、かなり絶望的な状況だ。

## 7 日目

魔物に襲われている行商人に出くわした。

火の剣の火球を連発して助けてやる。

行商人はお札に、と言って10000ルピー札を差し出してきた。

「金はいらない」

「なに気取ってんのよ借金持ちのくせに。いいから貰っときなさいよ」

女神が短絡的に言うが、2億の借金背負ってる俺が10000もらったところで雀の涙にもなりはしない。

「それより、あなたが旅して知ったこの世界の情報を教えてくれ」

これが真の賢者というものだ。

その場限りの金よりも、情報というもの

は遥かに貴重なのだ。なんか意識高い人達がネットで言ってたからな。

東に行けば魔王の城、北に行けば海、西に行けばエルフの森、南に行けば砂漠がある。エルフの森には不思議な泉の伝承がある、とのことだった。

「俺の火の剣で魔王を倒せると思うか？」

絶対に無理だ、人間の作ったマジックアイテムなど中級以上の魔物には全く通用しない、と商人は言った。



## 8日目

「魔王の城は東ね。行くわよ」

女神が信じられない事を言う。

「昨日の商人の話を聞いてなかったのかよ。  
今の俺が魔王と戦っても100%死ぬだろ」

「あんたが死んでも、また魔法石を貯めて  
勇者ガチャ回せばいいだけだし」

ガチャだったのか。

「向かうのは西の森だ」

「森なんかに行つてなんかいいことあるの？」

「パワーアップのイベントとか、便利なアイテムとかがあるかもしれない」

不思議な泉の伝承というのが気になる。

「地道に努力して強くなろうって発想はないわけ？」

「ガチャ回してるお前に言われたくねーよ」  
西の森の近くまで来たとき、不穏な噂を聞いた。

魔王の部下でも1、2を争う腕利きが、  
この森にやって来るらしい。

## 9 日目

俺達が森に入った直後、魔王の右腕である暗黒騎士が何百人という部下を従えて森を包囲した。

なんでも、今この森には魔王軍が最も警戒する「青の勇者」が滞在しており、その討伐に赴いたとのことだ。最悪のタイミングだった。

「青の勇者って俺のことじゃないよな」

「当たり前でしょ。なんであんなみたいなのザコを魔王軍が警戒するのよ」

「くそ。とばっちりってことかよ」

奴らがいなくなるまで隠れてやり過ぎそうとしたが、あっさり見つかってしまった。襲い掛かって来た魔物に、火の剣の火球

を放つ。

直撃したが、魔物はちょっと顔をしかめただけだった。

「やっぱり魔王の右腕は強いんだな」

「アホ。あれは魔王軍の一番下っ端よ」

つまりこれと同等以上の敵が数百人いて、さらにそいつらを束ねる暗黒騎士がいるのだ。

俺は一目散に逃げだした。

やれやれ、などと言う余裕はない。

## 10日目

一日中逃げまどっていた俺達の前に、救世主が現れた。

青い髪の女神と、彼女が召喚した青の勇者だった。

屈強なその男は魔王軍の兵士を次々と切り倒し、暗黒騎士とも互角の戦いを始めた。「いいなあ、あの勇者。わたしもああいうSSレアを引きたかったわ」

こっちの緑の髪の女神がほざいた。

「そりゃ俺のセリフだ。あの青い女神は、なんか凄い技使って援護してるじゃないか」

青の女神は手から竜巻を繰り出し、青の勇者の背後を狙う敵兵を一掃していた。勇者が一流なら女神も一流のようだ。

俺も一応、火の剣で援護しようとしたが、狙いが外れて青女神の髪を焦がしてしまった。

ここは私達に任せて逃げて、と青女神は言った。

言外に「邪魔だからあっち行つてろ」という含みがあったような気がしたが、お言葉に甘えさせてもらうことにした。

## 11 日目

また一日森の中をさ迷って、ついに泉にたどり着いた。

背後には、俺達を追ってきた魔王軍の兵隊が迫ってきている。

俺は火の剣を泉に投げ込んだ。

「なにやってんのよ、あんた!」

「まあ見てろ。こうすればきつと……」

水面から泉の精霊が現れた。

「貴方が落としたのは、この究極の魔剣

『超閻魔煉獄爆炎刃』ちやうえんまねんごくばくえんじんですか? それとも至

高の聖剣『絶氷光烈竜神凍牙』ぜつひようこうれつりゅうしんとうがですか?」

予想通りの展開だった。

俺はもちろん正直に答える。

「火の剣です!」

「素晴らしい。正直者の貴方には魔剣と聖剣を両方あげましょう」

俺はさっそく魔剣なんちゃらを振るった。鼓膜が破けそうな爆音とともに稲妻が走り、目の前の森は数十メートルの範囲で焦土と化した。

魔王軍の兵隊達は、骨も残さずこの世から消滅していた。

「すごい剣ね。あんたみたいなカスザコでも、こんな威力の魔法が使えるなんて」

この女神も泉に叩き落としてやろうか。

## 12日目

青の勇者と別れた場所に戻ってくると、なんと彼らはあれから2日間戦い続けていた。とんでもない連中だ。

俺は暗黒騎士めがけて炎の魔剣を振るった。自然保護活動家が激怒しそうなレベルで森が消滅する。

しかし暗黒騎士はその攻撃を耐え、生きていた。

「マジかよ」

暗黒騎士が凄まじい速さで俺に詰め寄り、俺の手から魔剣を叩き落とした。

「ああっ！」

あれがなくては勝負にならない。

暗黒騎士が俺の首を目がけて剣を振りか

ぶる。

青の勇者と青の女神が駆け寄って来るが間に合わない。

（死ぬ）

そう思ったとき、目の前を光が走った。

女神……俺の方の女神が、聖剣なんちゃらを振るったのだ。

暗黒騎士は周囲数百メートルの森と共に、完全に凍結した。

「やったね」

めでたしめでたし、と思ったのもつかの間、森を滅茶苦茶にしたと激怒したエルフ達に追い掛けられ、逃げ出す羽目になった。